



発掘 文学の宝



町では、本年度より「熊本県夢チャレンジ事業」を活用し、苓北町に残る文学の宝を発掘しています。今回は、苓北町にゆかりのある文豪たちを紹介する連載企画第2回目として、連載企画の経緯を含めて、文豪たちと苓北町とのエピソードを紹介します。

企画／ドットワークス 下川嘉奈

勝海舟

昨年生誕 200年

江戸無血開城に貢献した幕末の偉人

林芙美子

昨年生誕 120年

自伝的小説「放浪記」を書いた

ベストセラー作家



キラキラ光る文学の宝を拾い集めて

下川嘉奈

先月から始まったこのコラム。なぜ11月スタートだったのかと思われた方も多いかもしい。種明かしをすれば、タイトル事業の調査の中で11月に吉本隆明が生誕100年だと知ったからである。私自身は生粋の吉本ばなな（小説家）世代ではあるものの、恥ずかしながらその父親については全くのノーマールだった。無知を隠さずに言

えば、ある世代には熱狂的なファンがおり、世間では知の巨人と呼ばれていると知ったのはほんの数年前のこと。それほど人物がこの町にルーツを持ち、しかも本年がメモリアルイヤーに当たると知り、これは何としても町の皆さまにお知らせしなくては！と、一人で盛り上がった。その勢いのまま町担当課に直談判すると、意外にすんなり受け入れてもらうことができた。画が実現したのである（感謝！）。

町民の皆さまからのお叱りを覚悟で告白すれば、吉本隆明に限らず、この苓北町を知ったのも3年ほど前のこと。足を踏み入れこの島を歩くたび、苓北町どころか『天草』を全く知らないことを実感した。恥の上塗りでさらに続けると、その頃に天草といえばと質問されたら回答は「天草四郎、一揆、隠れキリシタン、海鮮、イルカウォッチング」…と、小学生レベルである。縁あってこの「文学の宝」事業にかかわることになり、土地の歴史などの知識も中学生レベルくらいに増えた（はずであり）。

る。さらに町に残る文学を掘り進め、小さいけれどキラキラと光る宝の数々が発掘できたと感じている。ここだけの話、有名、やや有名な文人、昔の映画人の話など、町に立ち寄ったことなどは皆さままわりとご存じだと思いが、実はその横にこぼれているちょっとしたエピソードが楽しく、魅力的なのである。例えば、富岡にあった旅館・岡野屋を舞台に『天草灘』を書き残した林芙美子。彼女が亡くなった後の林芙美子のご主人と女将さんとの交流。映画のロケで滞在した熊本出身の名俳優笠智衆の最後の言葉が天草にまつわる事。他にも、苓北町では鎮道寺の落書きで有名な勝海舟。一緒に来訪した人物に榎本武揚、五代友厚がいることを知り「大河ドラマの主役級の面々ではないか」と吃驚（ききょう）し立ち寄った一日をミニドラマにできないものかとの壮大な妄想や、これはお土産ができる、こっちの話は町のグルメに…と、頭の中をぐるぐる企画がめぐって忙しい。

観光資源を考えると【文学】は、史跡や風景と違い文字にしないと目に見えない。だが、たった一行で人生を変えるほどの力があつた、それは文学ファンにとつてかけがえのない強い光を持つ。私は、その力を信じている。読み込む書籍が増え、本を握りしめたまま寝落ちする現状はさておき、拾い集めた宝を磨き、整える作業がとても楽しみである。

お勧め本

『天草の文学』
武藤光磨 / 編著 熊本懸國語研究会

70年以上前に編纂された天草文学の良書。多数の作品の中に苓北町も登場する。現在廃版のため県内の図書館などで見かけたらぜひお読みください。